

佐藤愛子

花はいろいろ



花はいろいろ

佐藤愛子

花はいろいろ

一九八三年十二月二〇日 第一刷発行

定価 八八〇円

著者 佐藤愛子

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

郵便番号 一〇一

電話 出版部 (〇三) 二三八一二八四二

販売部 (〇三) 二三〇一六一七一

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします

目次

隣の花	5
夫婦とは	41
情熱の行方	89
はなやぎと悲しみ	136
両手に花	171
最後の出発	206

装帧
滩本唯人

花はいろいろ

隣の花

1

年が改まって間もなく、島本の静さんしずかが満六十歳の誕生日を迎えたというので、島本さんの家ではお嫁さんの正子さんが朝からデパートへ行つて、両手に持ち切れないほどの買物をしてタクシード帰つて来ると、それから馳走造りに大童でした。

学校はどこもまだ冬休み中ですので、中学生の弓子ちゃんゆきこは台所を手伝い、高校生の悟さんさとるや小学生の勝ちゃんかつまで何だか忙しそうに勝手口を出たり入ったりしています。七十二歳になる静さんのご主人の卓造氏も毛糸のマフラーに正チャン帽をかぶつて、木枯の中をどこかへ出ていかれたと思つたら、やがて真赤なバラの大きな花束を抱えて門を入つて行かれました。

夕方にはいつもより早く息子さんの秀一さんが勤め先の銀行から帰つて来られ、あかあかとシャンドリアが輝く下の横長のテーブルを、静さんを真中に一家七人が囲んで、多分、

「おばあさま、還暦おめでとうございます」

隣の花
といったのでしよう、口々に何やらいいながらニコニコ頭を下げるのが、大きなガラス戸の向う

に見えました。

音を立てて木枯の吹く日暮れです。こんな日にすることもなくひとりで炬燵に入っているのも暢気でいいように見えるでしょうが、これも毎日となると少しもよくありません。特に冬の夕方の一人居は寂しさが身に染みるのです。

私の家は静さんの裏隣にあつて、二階の三畳からはそう広くない芝生の庭を越して家の中がよく見えるのです。それでつい、退屈のあまりとか、寂しさのあまりとか、私は二階の三畳の窓際に炬燵を置いて、朝夕お隣の様子を眺めるということになってしまいました。

今日、静さんは（私には少し派手に見えるのですが）ツバメ模様の琉球絨の上下を着て、とても嬉しそうです。静さんは私とちがつて愛想のいい、表現のゆたかな人ですから、嬉しい時はほんとうに女学生になったように嬉しさを見せるのです。窓から見て私は思わず、

「——ああ、羨ましいなァ……」

ひとり言を口に出してしまいました。

静さんはよく、

「松本さんはいいわねえ。旦那さまはいないし、こんないいお家はあるし、息子さんは上出来で、しかも大阪勤め、うるさい孫も嫁もじいさんもいなくて、ひとりノビノビ、好きなことしていられる。ホントに羨ましいわ……」

といってくれますが、倅に馴れた人が人の不幸がわからないように、静さんは賑やかさに馴れて、寂しさとはどんなものがわからないのです。

私も静さんと同じ六十歳。静さんより三月後の生れですが、私は還暦を祝ってくれる者など一人

「もいそうにありません。息子と娘が一人ずついますが、息子は大阪で世帯を持ち、それも私に一言の相談もなく同棲した果の結婚で、娘の方は埼玉県の団地にいますが、土地つきの家を建てるのが一生の目的とやらで爪に火を灯すような暮しをしてお金を溜めているという情けない夫婦なのです。母さんは家を守ってくれよな。オレたちが本社勤めになって帰ってくるまで」

と息子は私に大阪へ来いともいわずに虫のいいことをいい、娘は娘で、

「お母さん、寂しかったら時々行つてあげてもいいけど、その代り電車賃出してちょうだいよ」
口を開けば、情けないことしかいいません。

私は毎日、ひまで時間をもてあましているの、娘に膝かけを編んで送つてやったことがあります。いつになく喜んで電話でお礼をいつて来たと思つたら、なんと、その膝かけを近所の奥さんに三千円で売つたというではありませんか。その近所の奥さんは自分が編んだような顔をしてそれを姑さんにお歳暮にあげたとか。

「母さん、どうせ暇なんでしょ。古毛糸でいいからもつと編んでちょうだいよ」

そんなことをいつて、私には一文もよこさないのです。

私は編物や縫物をするのをきっぱりやめました。

「目が悪くなったから、手先のことは出来なくなつたのよ」

といつて。何かを作つて喜ばせよう、という気持を捨ててにしました。煮豆も塩昆布も昔は「お母さんのはデパートのよりおいしい」といわれて、はりきつて作つたものでしたが、それももうやめました。娘は私の作つた煮豆も近所の奥さんに売つたらしいのです。

静さんの満六十歳の誕生日の翌日、私が魚屋へ行こうとして家を出ると、追いかけるように静さんが門を出て来て、後ろから声をかけました。私はあら、といって立ち止り、

「昨日はお誕生日、おめでとうございました。ご主人やお孫さんに囲まれてほんとうに倖せを絵にしたようでしたわ。私、二階から拝見してましたのよ」

そういうと、静さんの大きな眼にみるみる涙が出て、

「隣の庭の花はみんな赤いのよ！」

吐き出すようにいい、

「ねえ、少しお話しませんか？ 聞いていただきたいの、よろしかったら角屋へでも行きませんか？」と私を誘いました。

角屋というのは時々、私と静さんが話し込むお汁粉屋です。もう間もなく夕食だからという私にかまわず静さんは、お雑煮を二人前注文し、それから暫くしてアン蜜を追加注文し、最後に「こんなに長くいては角屋さんに申しわけないから」といって、食べたくもない葛餅くずもちを頼みました。それほど静さんにはいいたいことが詰っていたのです。

静さんの話は誕生日の祝賀会の、いかにくだらなかったかということから始まりました。私が二階から、琉球絃の上下を着た静さんがご主人の卓造さんから紅バラの花束を買っているのを見て、羨ましさに溜息をついていた時、静さんはにこにこ顔の下で、

「くそったれ！」

と思っていたのだといいます。

「おめでとう、ますます健康で、いっそうがんばって下さい。頼りにしていますよ」

と卓造さんがいい、頸を伸ばしてチュッと静さんの頬っぺたにキスをした時、家族の人たちが、わーっと笑って手を叩いている中で、静さんは又しても、

「くそったれ！」

と胸に叫んでいたのだそうです。それからお嫁さんの正子さんが、

「満六十歳という年は生れた時の年と同じ干支えとに還る。おばあさまは大正十二年五黄土星、亥年のお生れなのね。そして六十年目の今年が同じ五黄土星の亥年に廻り会ったの。だから年が還る——還暦というのよ」

と子供たちに説明をはじめ、

「六十歳という年は、これから愈々老年に入りますよという関門なのね。昔は六十歳がくると一切の公役を退いたものなの。家長の地位も譲ったんです。そうして子供のような無垢な氣持に立ち還って下さいという意味で赤いちゃんちゃんこを贈るんですよ」

そういつて、アンゴラジャージの赤い袖なしを、

「お洋服の上にもお召しになれますように」

とさし出した。その時も静さんは、

「くそったれ！　こんちくしょう！」

と胸に叫んでいたとか。

「正子さんっていうのはねえ、すぐしたり顔に三文知識をふりまわすのが好きなのよ。そしてその中に必ずアテツケが籠ってるの……」

静さんのそういう氣持は私にもわからないではありません。「子供のような無垢な氣持に立ち還

って」とか「家長の地位も譲ったんです」とか……正子さんが何げなく知っていることをただ口にしただけであるとは私にも思えません。

けれども、それはそれとして、静さんが恵まれていることは確かではありませんか。娘や息子がいても誕生日に誰からも祝ってもらえない人は沢山いるんです。

「でも静さん、それは少し贅沢じゃありません？」

「いい私はそうたしなめるようにいつてしまっただんですが、静さんは、
「そうかしら？……」

不本意そうに口を尖らせて、

「でもね、勝代さん……私にはいうにえない辛いことがあるのよウ……」

と低い声でいうと、その辛いことの代償のように、眼の前の葛餅を楊子で突つづいたのでした。

静さんが何といおうと、静さんに本当に辛いことなんかある筈がないのです。何をいっても静さんの愚痴は私のとは違う。我儘です、贅沢です。そう思いながらじっと見返していると、いきなり葛餅に突き刺さった楊子が、勢よくポキンと折れました。

「どうなさったの、静さん——」

驚いていうと、静さんの手に残った楊子の半分は更に二つに折れました。

「勝代さんにはおわかりにならないわ……」

イライラ声でそういうと、

「私ね、もう、もう主人の顔を……見るのもイヤになってるの！」

急に女学生のようにはずっぱにいったのでした。

「えっ！」

私はびっくりし、あとは何といつてよいかわからず、静さんの言葉を待つばかりなのでした。

卓造氏は戦争中、四十代の前半でもう中学校の校長になったというほど出世の早い人で、「謹厳」という字を人型にしたような先生だといわれ、父兄の信望も篤く、また生徒からも一目置かれていたということも、五年前、静さんと親しくなった頃に私は聞いています。

趣味といえば碁を打つことで、それ以外には何もない。酒もタバコもやらない。たまに忘年会などで隠し芸を求められると、

「わたしのラバさーん

酋長のむすめ」

と歌って腰を振るのがせい一杯だったとか。その頃はそんな話をする静さんの表情はなごやかで、誰が見ても静さんと卓造さんは琴瑟相和しているご夫婦に見えていましたのに。

「男の真面目とか品行方正とか、あんなものは一文の値打もないものなのに、それをたいそうな美德だと思って、心から尊敬して、不平不満ひとついわずに従って来たんです。私は」

漸く静さんは口を開きました。

「もう何もかも、松本さんに聞いていただきますね。……うちの主人ときたら、女ひとり、十分に満足させられない未熟なエゴイストだったんですよ！」

私はドキン！ として静さんを見つめました。静さんがこれからいおうとしていることは、こんなお汁粉屋で口にするような事柄ではないのではないかと！

けれども静さんはかまわず堰を切ったようにつづけました。

「私って、夫婦の間のこと、そんなものだと思うってたんですよ。だって主人以外に経験がなければ、誰だってそう思いますでしょう？　結婚した当座こそ、毎晩のようにナニしましたけれど、秀一が生れてからは月に一度か二度。妊娠したとわかると、わかったその日から禁欲生活に入るんです。はじめは、この人はこんなことだって、本当はどこかで浮気をしてるんじゃないかなんて疑ったりして、心配だから私の方から誘いをかけましたら、まあその時の怒り方ったら……そんな淫らな女とは思わなかったっていうんですの、身体を考えろ、胎児のことを考えないのかって」

「普通の夫婦と反対なんですねえ」

「そうなの……」

静さんは廻りの人がふり返るような声を上げて同意し、

「でもそれがわかったのは最近なの！　正子さんが買ってくる婦人雑誌でいろんなことを読んで、はじめてわかったんですよ！　女の悦びは男のそれよりも強いなんて書いてあるじゃありませんか！　いえね、それは私だって全く何も感じなかったってわけじゃありませんわよ。でも小説に書いてあるような、声を上げたり泣き声を出したりするほどのものとは思いませんでしたわ。それにあのしかただって……あんなに色々あったなんて知りませんでしたの。私ね、そういうことをするのは、男に身体を売る商売の人だけだと思っていましたのよ……だから、何も知らず、何も味わうことなくこのまま朽ちて行くのかと思うと……しかもですよ、主人はそれを当り前のことに思っていて、私が幸福な妻として一生を送れたと感謝しているだろうぐらいに考えていることが……私、もう許せないの……口惜しいの……情けないの……」

そういう静さんの、尖った眼に浮かんだ涙は、口惜し涙か、怒りの涙か。

「もう主人とは半年以上も交渉がありませんのよ。七十の声を聞いたんだから、長生きするためにそういうことはそろそろつつしもうね、というんです。主人は七十の声を聞いたかもしれないけど、私は七十じゃない、六十の声を聞いたばかりなんですからね！」

私はまるで、卓造さんその人であるかのように静さんに凝視され、何もいえずにうつむくのでした。

静さんと別れて家へ帰って来た時は、短かい冬の日はいつかもうすっかり暮れていました。

私は買って来た魚を煮つけると、食事を始める前に二階へ上って島本さんの家の様子を窺いました。島本さんの居間はいつものように、シャンデリアが輝き、平和な夕食が始まろうとしているところでした。

正面に静さんが見えます。静さんの両側は弓子ちゃんと勝ちゃんです。その向い側、私に背を向けて卓造氏と悟さんが並んでいます。そしてテーブルの右と左に秀一さんと正子さんが向き合っている。

静さんは勝ちゃんに魚の骨を取ってあげているようです。それから手を伸ばして卓造さんの小皿に、お惣菜を取り分けています。「クソツタレ！」と思いながらそうしているのでしょいか。

静さんから今日の話を聞く前と聞いてからとでは、同じ一家団欒の食卓風景にとっても大きな差があります。

静さんが笑って何かしゃべっています。

「クソツタレ！」と思いつつ笑っているのでしょうか。

「卓造が憎らしいだけじゃないんですのよ。秀一も正子も憎らしいの」

静さんはそういつてました。

なぜ息子夫婦が憎らしいかといえば、息子夫婦は、長男が高校生になっていているというのに、いまだに三日に一度は交渉をもっているらしい。それが憎らしいというのでした。

静さんが、そんな形の不幸を抱えているとは、夢にも思わないことでしたけれど、でもやはり私には、静さんの不幸は少し贅沢に思えるのです。もし今神様が、ではお前に死んだ夫を返してやる、息子も娘も優しく可愛かった子供の頃に戻してやる、そのかわりお前はアレを我慢するんだぞ、それでもよいか、といわれれば、私は喜んで「結構でございます。どうかそうして下さい」と答えるでしょう。

毎日することがないので、私はこうして毎日あったこと、思ったことを書くのを楽しみにしているのです。私は子供の頃から書くことが好きで、女学校時代は勉強もせずに手紙や小説のようなものばかり書いていました。

「将来の希望は？」

と先生から訊かれて、「小説家」と答えたこともあります。その頃、教室で机が並んでいた山藤さんは将来の希望はと訊かれて「外交官夫人」と答えていました。その山藤さんがこの頃活躍している小説家の山藤小夜子です。そして小説家を夢見ていた私は平凡なサラリーマンに嫁いで平凡な妻となり、平凡な未亡人になってしまいました。世の中というものは、ほんとうに意外性に富み、無惨で面白いものです。